夢の中のパセリヘ
浦根絵夢

講談社X文庫

浦根絵夢（EMU・URANE）
神戸出身。東京都大田区在住。好きなこと／ウーロン茶飲みつつマンガを読む。好きな食べもの／とびきりおいしいスープ。好きなひと／ジョーダンのわかるヒト。好きな花／カサブランカ。好きな香水／ディオリッシモ。好きな時間／物語を考えている真夜中。そして、猫たちに囲まれてベッドにいる睡眠時間。著書は「猫街ふあんたじい」「URASHIMAめるへん」「チョコレート・フェアリー」「さよならカトリーヌ」（講談社X文庫）。
●これからも、どうぞよろしく♡

TEEN'S HEART

夢の中のパセリへ

浦根絵夢

●

1988年1月7日　第1刷発行
1989年12月18日　第9刷発行
定価はカバーに表示してあります。

発行者——野間佐和子
発行所——株式会社 講談社
東京都文京区音羽2-12-21 〒112
電話 東京(03)945-1111(大代表)
本文印刷—豊国印刷株式会社
製本——株式会社 大進堂
カバー印刷—半七写真印刷工業株式会社
©浦根絵夢　1988
Printed in Japan

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部あてにお送りください。送料小社負担にてお取り替えします。なお、この本についてのお問い合わせは、3局企画部あてに、お願いいたします。

講談社X文庫

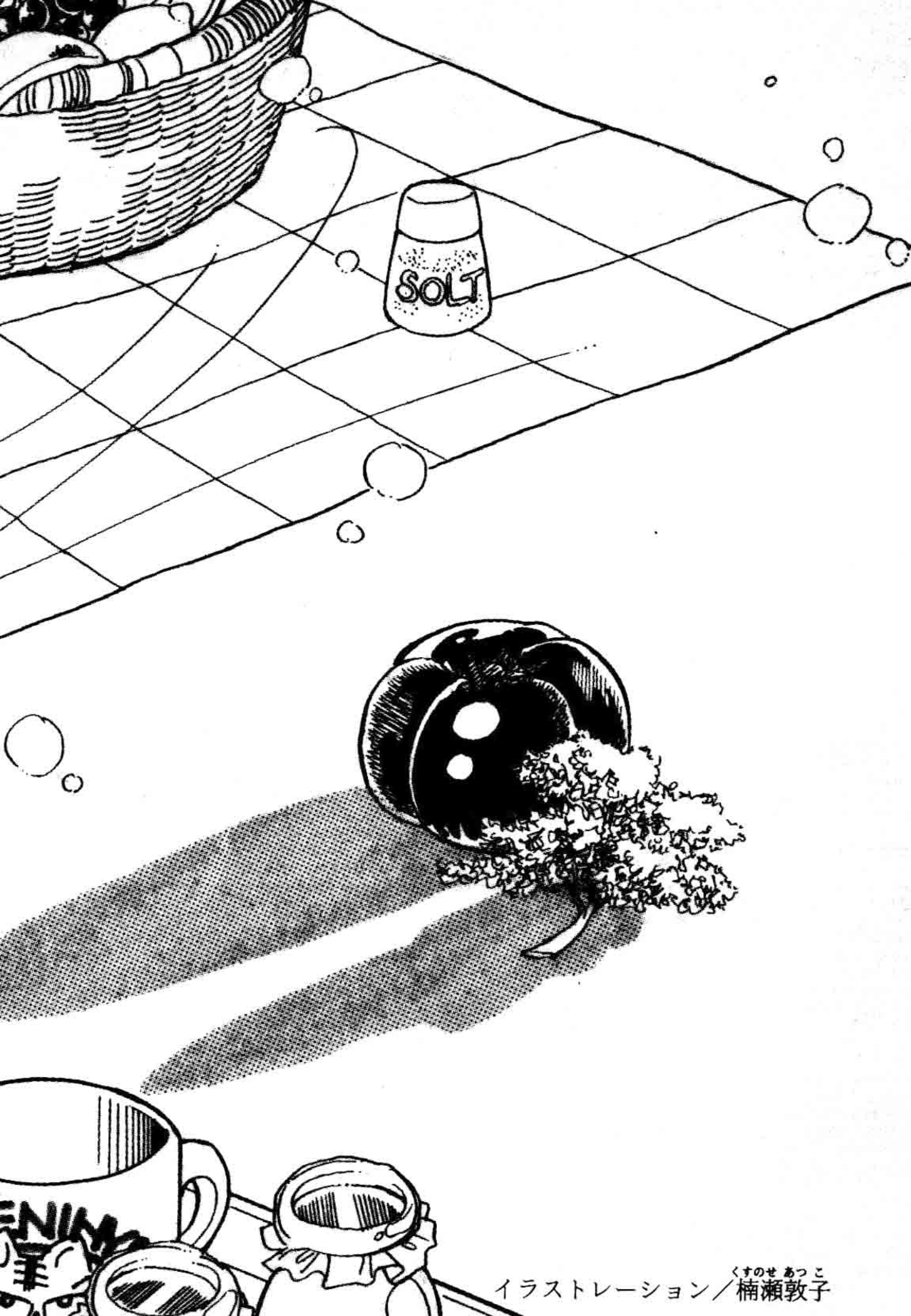
夢の中のパセリへ

浦根絵夢

目次

夢の中のパセリへ……5
あとがき……202

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com



イラストレーション／楠瀬敦子（くすのせ あつこ）

夢の中のパセリへ

1

ぶあしゃっ!!
ハデな音が、した瞬間。
あたしの目の前が、緑色に、そまっていた。
「きゃーっ!!　ぱせりっ!!　あんた、なにしてんのっ」
並んで歩いてたはずの、美加(みか)のワメキ声が、うしろから飛んできてる。
「ぱせりっ!!　ぱせりっ!!　ぱせりっ!!　もう、ドジ、バカ、マヌケッ」
あたし。
なにが、どうなったんだか。
まだ状況が、のみこめてなくて。
右手で、そーっと、顔を、ぬぐう。

とろおおり……。
緑色の。
液体。
「ペンキよ！　ペンキだってば、ぱせりっ！　あんた、頭から、ペンキひっかぶっちゃったのよっっ!!」
「ぺ……」
カシャン、カシャン、カシャン、カシャン。
アルミのハシゴを。
だれか、急いで降りてくる……気配。
カシャン。
すとん。
ペンキだらけのスニーカーが、あたしの目の前に、かろやかに着地した。
あたしは。
ペンキが、目に入りそうで。
薄目しか、開けてないから。
うつむいたままだから。

ハシゴを降りてきたヤツの、ヒザから下しか、見えてないんだ。
それも、緑色のヴェールの向こう……って、感じ。
「ひやー、まともに、かぶっちゃってんだあ！」
ヒザ下スニーカーが、おったまげた声、出した。
いや、正確に言うと、スニーカーが、叫んだワケでは、なくて。
スニーカーの主（ぬし）――声の調子からすると、若いオトコノヒト……が。
「いやー、こりゃ、ひでえや……」
つぶやいてるんだ、けれど。
「ちょっと、ペンキ屋さん！　ポカンと口開けてるバヤイじゃ、ないでしょっ!!」
美加が。
そいつを、ドナリつけた。
「あやまんなさいよ、まず、まっさきにっ！」
「あ、ああ、ああ、ごめん。ごめんなさい。悪かった。あまりの、みごとさに、オレ、ついつい、見とれちまって……」
「いいから！　ぱせりのコト、さっさと、なんとかしてやってよっ」
「ぱせり？」

そいつが。
美加に、問いかえした。
「このコの名前よ！　青山ぱせりっ」
美加が。
答えたとたん。
「ぶっふ――っ!!　ぶはっ、はは、ははははは、いやー、あーっはっはっはっはっはーっ」
そいつ。
吹きだして。
すぐさま続けて、バカ笑い、したんだ。
「笑うなんて、失礼でしょっ!!」
美加が、イカってくれてるけれど。
あたし……。
「美加、もー、いいよ。いいったら。行こ！」
ひとりで、トコトコ、歩きはじめちゃったんだ。
「ちょ、ちょっと、ぱせり！　待ちなさいよ。ぱせり！　ぱせりったら」
美加が。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

あわてて、あたしのあと、追っかけてきてるみたい、だけど。
――そんなに、ぱせり、ぱせりって、連呼しないでほしいよおおお……。
あたし。
緑のペンキで、わかんないかもしれないけど。
恥ずかしくって、ほっぺた、まっかっか、だ。
「ぱせりってば！　そんなカッコで、どこ行く気よ、ぱせりっ！」
すれ違いざま。
アカの他人が。
「クスクスクス」
「パセリだって、そのものじゃん」
無責任に、笑って。
無神経な言葉、投げつけてった。
あたしは。
死んじゃいたいぐらいに、哀しくなる。
「ぱせり！　待ちなっつってるでしょっ」
ついに。

美加が。
あたしの腕を、グイと引いて。
あたしを、立ち止まらせた。
「……」
「ダメだよ、ぱせり。そんなペンキだらけのまんまじゃ。早く、なんとかしなきゃ。ほら、そのジャケット、まず脱いで！」
「う……ん」
あたし。
のろのろと、美加の言ったとおりに、する。
「貸して！　見せて！　あー、こりゃ、もうダメだ。使いもんに、ならないワ……」
つぶやいてから。
美加は。
そのジャケットの裏側で、あたしの顔を、ぎゅっぎゅっぎゅっと、ふいた。
「美加ぁ……、それェ……、いちばんの、お気に入りのＶＩＶＡ　ＹＯＵのヤツう……」
「しょーがないでしょ。表のフラノ地に、ペンキべっとり、だもん。クリーニングしたって、どーにもならないわよ。あきらめなさいっ」

美加ったら。
残酷にも！　冷酷にも！　――けど、美加の処置は、とても正解では、あるんだが……。
ジャケットの裏地を。
ビビビビビッ!!
表地から、ひっぺがして。
「ちょっとゴメンよっ」
言いながら。
まだ汚れてない表地の内側で。
わしわしわしわしわしっ。
あたしの髪のペンキを、大ざっぱに、ふきとってくれた。
「そいでー、と」
裏地のほう。
くるりん。
さっき顔ふいた面を、中にして。
ぱほっ。
あたしの髪を、くるんでくれて。

「ん、とりあえず、OK。さっきの、ぱせり。まるでゾンビだったわよ」
美加は。
ほっと、ひと息ついた。
「さて、と。あいつ！　あのペンキ屋にーちゃんに、抗議しに戻んなくっちゃ。ぱせりが、さっさか、さっさか、歩いてっちゃうんだもん。あせったわよ」
「いい……」
「え？」
「帰るよ、このまま」
あたし、うつむいたまんまだ。
「なに言ってんの！　弁償させなきゃ。ぱせりのジャケット！　それと、カバンも。クツだって、ペンキが、はねちゃってて……」
「いーったらあ!!」
「ぱせりっ」
「いいのっ!!」
あたしは。
美加が、あたしのためを思って、いっしょけんめになってくれてる、その気持ち。

痛いぐらい、わかってたし。
だから、申しわけないなって、考えてたけれど。
「帰るっ!!」
言ったっきり。
美加ほったらかして、駆けだしちゃったんだ。
ぱ――せり――っ!!」
美加が、呼んでてくれるの。
聞こえてて。
ムシして。
あたし、全力疾走。
人通りの少ない道、選んで、選んで、選んで、必死で急いで。
うちへ、逃げ帰ってきた。
ピンポン、ピンポン、ピンポン♪
ドアチャイム、あせって、3回押しちゃう。
早く家の中へ、入りたいよお……。
ジャケットの裏地で、ほっかむりした姿なんて、ご近所のヒトに、見られたくないよお。

「ぱせりちゃんなのー？」
ドアの向こうから。
ママの、のーんびりした、声。
「そう！　ママ、早く開けてっっっ」
「あらら、せっぱつまった声ね。お手洗い、ガマンしてるの？　いま、開けるから……」
カチャン。
ロック、はずして。
キッ……。
ドア、5センチ開けたところで。
「ぱ……っ」
言ったっきり、ママは、たっぷり10秒間、絶句でコーチョクしてたんだよね。
「な……」
「とにかく、家へ入れてよー、ママ」
「そ、そ、そうね。お入んなさいっ」
やっと。
うちへ逃げこめて。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com